

東京女子医科大学東医療センター外科の紹介

東京女子医科大学東医療センターの歴史は、1934年東京女子医科大学附属尾久病院が現在の場所に開院したことに始まります。すでに70年以上の歴史があるわけですが、その間、1967年には附属第二病院に、2005年には東医療センターに名称が変更され、病床も486床に増床されて現在に至っています。東京の下町、荒川区という地域柄か、開院当初から大学病院でありながら地域に根ざした親しまれる医療を行っており、その伝統は無論今も受け継がれています。そのためでしょうか、大学病院と市中病院、双方の長所を兼ね備えた研修病院として、最近の臨床研修医にも人気があります。

外科は、1961年初代の坪井重雄教授が東京女子医科大学心臓血管研究所榊原外科教室から外科部長として派遣されたのを契機に新しい教室が作られ、1979年には2代 榊原宣教授が女子医大消化器病センターから病院長兼任で赴任され、1986年からは3代 梶原哲郎教授、そして2002年からは私、小川健治が担当しています。

日本癌病態治療研究会は、2001年に第10回研究会を梶原哲郎前教授が開催されています。本年、第16回研究会を会場も同じホテル日航東京で再び開催させていただきますことに私ども一同大変感激しています。名誉会長の磯野可一先生、会長の生越喬二先生はじめ、諸先生方に先ずあつくお礼申し上げます。

さて教室ですが、臨床は消化器・一般外科（71床）を標榜しており、「食道」、「胃」、「大腸・肛門」、「肝・胆・膵」、「乳腺」の5つのグループに別れて診療しています。各疾患の診断、定型的な手術に加え、腹腔鏡下手術、消化管癌の内視鏡的切除、食道静脈瘤の内視鏡治療、各種のIVR治療、癌化学療法・免疫療法などを行っています。当教室の特徴は診断をはじめ各種内視鏡的治療、IVR治療などを伝統的に外科で行っていることでしょうか。業務としては大変に忙しく、時に自分自身の首を締めているようにも感じますが、教室員個々のスキル・アップのため、頑張っつづけていきたいと考えています。

研究の中心はやはり「がん」に対するもので、腫瘍免疫学、分子生物学の分野からアプローチしています。臨床研究、実験的研究とも、外科医しか手にできない臨床検体や手術標本を材料としたものが多く、教室員一同、癌病態治療研究会が主張する腫瘍外科医（Surgical Oncologist）を自負しています。

教育面では、女子医大の特徴であるチュートリアル・システムにチューターとして参加することをはじめ、クリニカル・クラークシップ（選択）やポリクリ（必須）の学生を積極的に受け入れています。後二者は2～3週間の病棟実習ですが、学生は上記の各臨床グループに配属され、その一員として頑張っています。若手教室員の研修カリキュラムはさておき、もう一つ大切なのは先にも述べた臨床研修医の教育です。具体的には紙面の関係で割愛しますが、外科医が不足する昨今、外科に興味をもってもらい、一人でも多く教室に入局してもらうためには、この学生と臨床研修医の教育の充実が何より大切と考えています。